

〈実践論文〉

広島県廿日市市立宮園小学校にみる小学校図画工作科教育の指導 —生き生きとした表現教育の原点をふり返る—

Attractive art education in an school named Miyazono elementary school in Hiroshima
— With respect to the severe situation of Japanese art education nowadays —

金子 美里^{*1}

1) 本研究に協力していただいたのは、平成 29 年度広島県造形研究大会*の開催校である広島県廿日市市立宮園小学校（石井憲幸校長先生、研究主任の松井先生）である。

同校における図画工作科の授業は、教師が学年の発達過程をふまえて、導入の言葉かけを厳選し、児童の心をワクワクさせている、この点が大きな魅力である。どの学年においても、導入の言葉に温かみがある。そしてすべての題材の指導計画に「あじわう、あらわす、みつめる、さぐる、であう」という各段階を位置付けており、児童がつくりだす喜びを味わうことを目指した取り組みを行っている。特に、「さぐる」においては、その時間が十分にとられており、子どもは数ヶ月にわたって素材に触れて積み重ねたりつないだり切り開いたりする中で、新しい形に出会っていく。教師は身近な材料を使い、発達過程に応じてその強度や大きさにも気を配っている。また使う道具も、子どもの発達に応じて、注意力を要する道具にも挑戦させ、何ができるのか自分でつかむことをさせており、身近な素材で未知の体験が追求されている。加えてまた、子どもの視線や思いを重視し、教師は基本的に、個の発達や成長を見守る立場として、題材によって児童を刺激したくさんのことを感じさせ、気づかせる授業を行っている。

2) 本論では、宮園小学校図工科教育において、子どもの心に生まれる高揚感や発想など、表現へのエネルギーが生まれている、この秘密は何か研究したい。そのことを通して、図画工作科教育が困難な時代と言われる中で、宮園小学校の実践がなぜ魅力的なのか、その理由の一端を明らかにしたい。

そのさい本論では、同校児童作品等の調査・研究に加え、同校表現教科の表現教育者の視点から授業展開を正確に把握し、教授展開連鎖を構造的に分析するという教科教育学の基本的な方法論を活用した。

Key words: 宮園小学校、魅力ある図画工作科の授業、身近な素材で未知の体験、刺激し気づかせる授業

1. はじめに

1) 本研究では、わが国図画工作科教育の困難な状況に加え、同教育の授業構築力の後退現象が若手教員に進行しつつある中で（鈴木

（2015）参照）、廿日市市立宮園小学校の小学校での生き生きとした図画工作科教育に注目し、各成長段階とそれに順ずる多種多様な図画工作科教育開花の手掛かり（多種多様な試みが相互に響き合い、開花し合う手掛かり）がどこにあるか、その一端について考察する。

同校では、図画工作科教育の取り組みと視点

^{*1} Misato KANEKO
佐世保市立大野中学校

を、図画工作科教育と表現教育との「複眼」的視点によって把握する取り組みがなされてきた。ここに宮園小学校の表現教育の取り組みを取り上げる意味がある（宮園小学校（2017））。

2）子どもは、図画工作科教育を体験することで、何を得てどのように発達していくのか。

筆者は、中等学校の表現教科教諭として勤務してきた経験から、その前段階である小学校における表現教育を見つめることで、生き生きとした表現教育の原点に着目し、その魅力に迫りたい。

なお本論では、形容詞「生き生きとした」は楽しい、活気、やる気、勇気、変化がある、動きのある、という意味で使用される。

本研究に協力していただいたのは、平成29年度、第56回 広島県造形研究大会の開催校である広島県廿日市市立宮園小学校、ならびに石井憲幸校長先生、研究主任の松井先生である。

この大会では、「いのち輝く造形教育を求めて」をテーマに、子どもの生き方や自己表現にかかわる美術教育のあり方を求めて、保育園・幼稚園、小学校、中学校、高等学校での縦のつながりを重視し、実施された。そして「義務教育を終える段階で身に着けるべき力」とは何かについて各学年担当が目標を明確にし、実践を行った成果が公開された（広島県造形教育研究連盟（2017））。

3）本研究では、広島県廿日市市立宮園小学校を訪問し、同校展示児童作品を鑑賞・研究し、校長先生・研究主任の説明を聴取し、研究大会誌、その他資料を参考文献とし研究する教科教育の一般的方法論を活用すると同時に、同校表現教科の授業連鎖構造を表現教育者の視点から構造的に分析する、という教科教育学の方法論を活用した。

2. 宮園小学校における図画工作科教育とその魅力

（1）乳幼児期から児童期への発達過程と図

工教育の実践

乳幼児期、児童期における子どもの成長は人生の中できわめて変化に富む激動の時期である。

幼児期の間には運動機能や言語の発達、排せつの自立のための身体的機能も整ってくる。食事、衣類の脱着など身の回りのことを自分でしようとするようになり、知的興味や関心が高まり盛んに質問するなどして自我がよりはっきりしてくる。3歳ごろになると、仲間とのつながりをもつ中でけんかも増え、決まりの大切さに気づき、少しずつ我慢が出来るようになる。5、6歳になると、異なる思いや考えを認めたり、様々な知識や経験を生かし、創意工夫を重ね、遊びを発展させたりすることができるようになる。

個人差はあるが、このような乳幼児期の発達過程を経て小学校へと入学した児童が図画工作科の授業で何を獲得し成長していくのか、そして教師は、児童のどこに着目し、題材を設定し支援していくのか、以下ではこの課題を、廿日市市立宮園小学校の実践を手掛かりとして考察してみたい。

（2）宮園小学校にみる図画工作科教育の多様で魅力的な実践

1）第一局面：低学年における生き生きとした図画工作科授業の連鎖

①第1学年の実践

題材名「がったい！はこはこロボット登場！」

目標：A表現（2）「好きな色を選んだり、いろいろな形を作って楽しんだりしながら表すこと」

授業者は、児童に事前アンケートをとり、図画工作科に対する児童の意識調査を行っていた。アンケートの結果から、「図画工作の勉強が好き」という生徒は79%で、児童はおおむね意欲的な意識をもっていることが分かった。

しかし、「みんながびっくりするようなアイ

デアを考えるのは楽しい」という考えをもつ児童は68%にとどまった、という。その要因として、指導者は、発想を広げて活動することに重点を置いて指導したことが少なかった点を挙げている。

そこで、本題材で授業者は題材名を「がったい！はこはこロボット登場！」と題し、導入である〈アートスイッチが入る提案の言葉〉として、「はこはこロボットパッケンは友達がいなくてさみしがっています…友達ロボットをつくってあげましょう」と児童に投げかけた（図1参照）。そしてあらかじめ教師が作った箱ロボットを提示することにより、ロボットをどう作るかイメージできるようにした上で、意欲を高める導入を行った（子どもは「であう」（以下、「子どもは」は省略））。

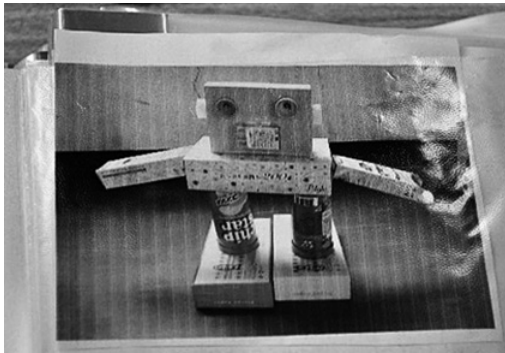


図1：教師による作品例「はこはこロボット」



図2：児童作品
「がったい！はこはこロボットとうじょう！」

指導の流れは3つの展開で構成し実施された。

第一のステップでは、つくりたいものが見付けられるように、箱を並べたり積んだりする活動を十分楽しめるようにした（さぐる）。

第二のステップでは、箱の並べ方、積み方、組み合わせ方をかえると新たな形が生まれ、また違う形に見えることに気付かせ、発想が広がるようにした。また、ロボットの名前や、どんな特徴があるかなど、友達の意見を聞き発想のよさを感じ合わせた（「みつける」）。

第三のステップでは、つくったロボットの自己紹介をし合い（図2参照）、箱の使い方や組み合わせの面白いところや工夫を見つけて「いいねカード」に書き、そのカードを友達がつくったロボットに貼りながら、話し合う機会を作った（「あらわす」）（「あじわう」）。

【材料・用具】 空き箱、セロハンテープ、木材用接着剤、化学接着剤、粘着テープ（クラフトテープ布テープ）、両面テープ、洗濯ばさみ、サインペン、ペットボトルの蓋、トイレットペーパーの芯、ひも、毛糸、綿、フルーツキャップ、デザートカップ、ワークシート、はさみ、クレヨン

ー関わり合いの中で発想を広げる授業ー

この題材は、この時期の児童の発達の特徴である、生きものとして物をとらえたり、そのものになりきって表現したりすることができることを生かし、導入の言葉かけによって子どもの造形活動への意欲を喚起している。また、素材と触れ合う場面や、組み合わせを考えさせる場面にじっくり時間をかけることで、つくりたい形のイメージをもたせるようにしている。そして鑑賞の時間は、試行錯誤をした児童同士が関わり合う場面とし、互いに影響を受け、新たな発想を広げられるようにしている。教師の関わり方としては、形や色などを視点に個々の児童と対話をしながら、思いを把握して座席表にメモをとったり、活動が停滞している児童へ他の児

童の工夫を紹介したりしている。

教師は、児童の表現活動において他者とつながるための仲介役となり、児童を不安から開放することや、安心感を与えるような支援を行っている。

このことは、児童が自分に自信をもち、安心感の中で新たな一歩を踏み出すための支援となり、他者との関りをもつ「表現のはじまり」として、発達を促している。

②第 2 学年の実践

題材名「あったらいいな

すてきなまどのあるまち」

目標：A表現（2）ウ「身近な材料や扱いやすい用具を手を働かせて使うとともに、表わし方を考えて表すこと。」

この授業は、自分のつくりたい窓のある建物をアイデアスケッチで表し、カッターナイフで紙にいろいろな切り込みを入れてできる窓を開く仕組みを使って思いついたものを表す授業である。

導入では〈アートスイッチが入る提案の言葉〉として、「この窓すてきだね。いろいろな形や開き方があるよ。見ているだけでわくわくしてくるね。開いて中をのぞくと何が見えるかな。カッターナイフで紙を切るだけで窓が作れるんだよ。さあみんなですてきな街を作ってみよう。最後にすてきな窓のある町『2 - 1 タウン』をつくるよ。どんな建物があったらいいか工夫してつくってみよう」と投げかけ、興味・関心をたかめるように提示された（図 3 参照）。

指導計画の第一のステップでは、写真や見本を見て窓の形、開け方を知り、つくりたい窓、建物、中の様子を考えアイデアスケッチにまとめさせた。この際、窓を切り開くために便利な道具としてカッターがあることに気づく（「であう」）。カッターナイフの安全な持ち方、使い方を指導し、練習シートにかかれた直線や曲

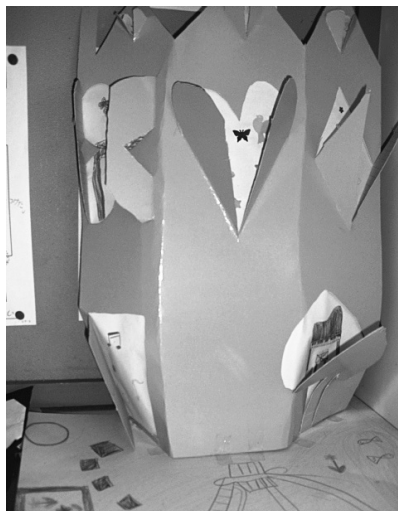


図3：児童作品「あったらいいな
すてきなまどのあるまち」

線を切ったり、「片方に開ける」「両サイドに開ける」「上に開ける」「四方に開ける」などの基本的な方法を紹介したりして「切って開いて窓を開ける」という表現方法についてイメージをもたせた。（「さぐる」）

第二のステップでは、アイデアスケッチを基につくりたい窓の形、開きたい形を工作用紙にかく（みつめる）。ウォッチングタイムで見つけた友達の窓のよさを取り入れ作りたいような窓をかき、切り開いた。そして中の様子を考慮して画用紙に絵を描いた（「あらわす」）。

第三のステップでは、一人一人の作品を集めて並べ「2 - 1 タウン」をつくり、友達の表し方で参考になったことを全体交流の場で伝え合った（「あじわう」）。

【材料・用具】 カッターナイフ、カッターマット、工作用紙、カッターナイフの使い方の掲示物、サインペン、作品カード、ワークシート、練習用シート、画用紙、クレヨン、クレパス、色鉛筆、ものさし、はさみ、のり、マスキングテープ、他

一道具との出会いを基に、思考力、判断力、表現力を高める授業—

この授業は、導入の〈アートスイッチが入る言葉〉に見られるように、第二学年としての心と体の成長に応じた目標の設定がなされた。作業にいくつもの工程があり、方法を学んだり、練習をしたり計画を立てたりして試行錯誤する場が設けられている。

ウォッチングタイムでは、「この窓の形すてきだな。わたしもつくってみよう」「こんな開き方もあるんだね」「窓の数を増やしたよ」など、友達のよさを見つけワークシートにメモしたものを基に話し合いをさせ、友達のアイデアのよさに気付かせている。このことは、宮園小学校の研究主題にある「～豊かな関わり合いを生かした活動を通して～」という点において、認め合うことや、他者と深く関わり合う活動をうながしている。また、子どもは運動機能の向上と情緒の安定により、カッターナイフを安全に使うこともできている。特に、この様に楽しみながら道具にでようことは重要な体験で、道具を恐怖心で扱うのではなく、楽しみながら作るために使うという肯定的な感情をもつことは、大人になっても記憶に残る重要な体験となるように思われる。

③第 3 学年の実践

題材名「大变身！切ってつないで動かして」

目標：A表現（1）ア「身近な材料や場所などを基に発想して作ること。」イ「新しい形を作るとともに、その形から発想したりみんなで話し合って考えたりしながらつくること。」

この授業は、切った段ボールを動くようにつなぐことから面白い形の変身を思い付き、つなぐ段ボールの形やつなぎ方を工夫してつくる題材の授業。思いのままに切り開いた段ボールを割りピンを使って動くようにつなぐことで、形や大きさが変化し、作品に動きを生み出すことができる。

授業計画の第一のステップでは、段ボールを

いろいろな形に切って、大きさや形に分けて集める（「でよう」）。

集めた段ボールから 2 つ選び割りピンでつないで動くようにすると何ができるか考える（「さぐる」）（図 4 参照）。

切った段ボールをつないで動かしながら、思いついた変身になるように工夫してつくる（「みつける」）（「あらわす」）。

できた作品で「段ボールランド」をつくり紹介しあう。どのように変身するか、動く仕組みの工夫とその面白さについて話し合う（「あじわう」）。



図4：児童作品「大变身！切ってつないで動かして」

【材料・用具】 割りピン、段ボールばさみ、段ボールカッター、きり、千枚通し、マジック、パンチ、粘着テープ、段ボール、接着剤、パステル、名前ペン、ひも、はさみ、工作版、カッター
ー試行錯誤の中から方法を見つけ出し、

発想を共有しあう授業ー

本題材は、割りピンを使うことによる動く楽しさをきっかけに、児童の好奇心や探求心を引き出し「変身」させるおもしろさを味わう造形活動である。「変身」や「変形」は、活動的で発想力豊かなこの時期の児童に適した題材となっている。

段ボールのつなぎ方を考えたり、つないだ形から新しい形を思いついたりするなど活動を広げることができるとともに、友達と合体させて

一緒につくったり、つくったものに合わせて活動場所を変えたりするなど、友達と一緒に活動する喜びを共有し、身体感覚を使ったダイナミックな活動が楽しめるものである。

教師の支援としては、割りピンの使い方や、穴の補強など、知識的なことをタイミングをみて伝えていること。また、表現することに関しては、児童がつくりながら考え、新たな発想へとつくり進む様子を見取り、その思いを共感的に受け止めることをしている。

また、使う道具の種類も増え、自分のアイデアに適した道具を選び、使うことができる。児童が試行錯誤の中で見つけたことを仲間と言葉で共有し、協力して作品制作に向かう中で、表わしたいもの（主題）にたどりつく授業である。

2) 第二局面：中・高学年における豊かな感性と知性に支えられた図画工作科表現連鎖

①第4学年の実践

題材名「立ち上がれ！ひみつのねん土城」

目標：A表現（2）ウ「表したいことに合わせて、材料や用具の特徴を生かして使うとともに、表わし方を考えて表すこと。」

事前アンケートによると、この学年の児童は図画工作科の授業が好きな反面、「思ったようにうまくかけない（「つくれない」）」ことや、「こまかくかけない（「つくれない」）」という児童が数名いる状況である。この時期は自己を客観的に見ることができるようになる時期で、苦手意識をもったり、すぐにあきらめてしまったりする時期でもある。そこで、素材粘土とし、繰り返し試すことで、粘り強く取り組むことができる題材を設定した。

授業計画の第一のステップでは、「粘土を使って、いろいろな形から、立ち上げてみよう」と投げかけ、粘土に触れる時間を十分にとり、粘土を「丸める」「伸ばす」などの方法で立ち上がる形をつくった（「であう」）。

第二のステップでは、「ねん土を立ち上げて、ひみつのねん土じょうをつくろう」と投げかけ、方法を工夫して粘土を立ち上げる挑戦が試みられた。板状や棒状などの粘土をバランスよく立てる方法を試しながら、生まれた形からつくりたいものを考える。児童は、粘土が倒れないように、バランスよく立ち上げる方法を工夫してつくっている。（「さぐる」）（図5、6参照）

粘土をバランスよく立ち上げたら、さらにつくり変えるために道具などを使い工夫する。（「みつける」）（「あらわす」）

第三のステップでは、友達のよいところや工夫点を鑑賞カードに書き伝える。友達の作品を参考にする中で、自分のイメージをさらに膨らませ、表現する時間をとっている。

【材料・用具】 土粘土、粘土板、粘土ペラ、のし棒、電子黒板、写真、濡れ雑巾



図5：児童作品「立ち上がれ！ひみつのねん土城」



図6：児童作品「立ち上がれ！まぼろしの塔」

ー粘土の特性を生かし、

粘り強い造形意欲をかき立てる授業ー

この授業は、「城」のイメージを想起するところからはじまり、手本なしで、粘土を触りながら考え、判断し、表現する工程となっており、児童がこれまでの造形遊びで身に付けた探す力や気付く力が十分に発揮される授業となっている。「粘土を立ち上げるために」という一見単純な目的であるが、それぞれの作品から強度や高さを見て感じることができ、他者の作品の制作方法や工夫をより強く感じ取られる題材である。よって、児童は粘土で繰り返し試行錯誤する中で、積極的に他者の工夫を取り入れ自分のもつイメージへとつくり進めていくことができる。その意味で児童の柔軟な感性を引き出すことのできる授業である。

②第 5 学年の実践

題材名「消しあとから生まれる『いのち』」

目標：A表現(2)ア「感じたこと、想像したこと、見たこと、伝え合いたいことから、表わしたいことを見付けて表すこと。」〔共通事項〕イ「形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。」

この授業は、コンテで塗り込んだ画面を消しゴムで消すことによって現れる形や色をとらえ、自分の中にある「いのち」のイメージを絵に表す活動である。素材は何度でもやり直しができるコンテと消しゴムである。

5年生と同様に、児童の発達の特徴として、「思ったように上手く描けない」「作品に自信が持てない」という思いを持った児童は増える傾向にあることから、素材としては、試したりやり直したりが簡単にできる素材を選定している。

授業計画では、第一のステップとして、「コンテや消しゴムを使って、ぬったり消したりしてみよう。」と投げかけ、素材について知る時

間をとった。(「であう」)

第二のステップでは、自分のなかにある「いのち」のイメージをイメージマップに表す。「どんどん伸びていくイメージだ」「力強い感じがする」「いろんな人に支えられてきたな」など、イメージマップに言語化させる。これらをもとに、はじめに「いのち」の種をかかせ、そこから消しゴムで描き広げていく。自分にとってよいと感じる形が生まれるまで、消したり塗ったりを繰り返す。(「さぐる」)(図7参照)。

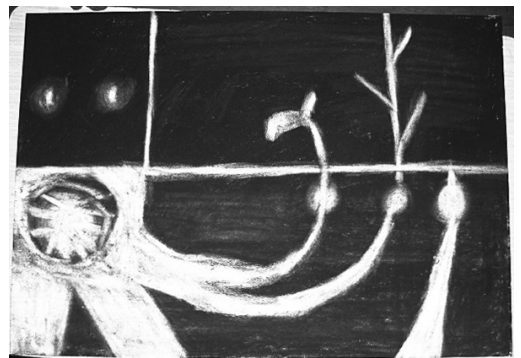


図7：児童作品「消しあとから生まれる『いのち』」

試行錯誤の中からどのようなことを思いついているか、対話して思いを受け止めたり、力の入れ具合や色の重ねなどを工夫したりしている様子を随時全体に紹介するなど教師の支援を交えながら、自分の「いのち」のイメージを見つける(「みつける」)(「あらわす」)。

第三のステップでは、鑑賞会を開き、自分や友達の作品のよさや美しさを味わう。トリミングカードを使い、表現の意図やその面白さを友達と伝え合う。

【材料・用具】 厚手の画用紙、コンテ、消しゴム、新聞紙、トリミングカード、汚れてもよい服、古タオル、筆記用具

ーこころとからだで生み出すイメージを

共有しあう授業ー

この授業は、描画に対する苦手意識を楽しく払拭するために、消す道具で描くという逆の

発想を用いることで、児童の表現意欲を高めている。そして、テーマを「いのち」とし、見たことのある形に向かうというよりは、体で感じたことや手の動きから発見したことをもとにイメージを形成していく授業となっている。

児童同士が影響を受け合いながら試行錯誤をし、自分なりに納得のいく形や色、気持ちに合う形や色を探すという題材である。このことは、新しいものを生み出したり、未知のものを感じ取ったりする重要な経験であり、児童の新たな造形への可能性を広げ豊かな感性を育てる授業へと展開する。

3) 第三局面：高学年における気持ちや経験を基に発展させていく図画工作科表現連鎖

①第 6 学年の実践

題材名「筆あーと研究所」

目標：B鑑賞（1）イ「感じたことや思ったことを話したり、友人と話し合ったりするなどして、表わし方の変化、表現の意図や特徴などをとらえること。」

この授業は、美術作品を鑑賞する際に、表現の工夫の一つである「筆あと」に注目し、「筆あと」の特徴から作者の表現意図や思いをとらえる学習。

また、実際に「筆あと」を体感し制作することにより、実感を伴った制作と鑑賞を行うことができ、感じ取った作者の表現意図や思いを友達と伝え合うことで、感じ方の違いを楽しんだり、自分の考えを確かめたりして、制作と鑑賞の能力を高めることをねらいとしている。

児童は、この題材の前に、「墨で表す インサイドヘッド」と題した題材に取り組んだ。これは、自分の頭の中にある感情を、黒一色の墨で表す学習で、児童は様々な道具や濃度による墨の表情の違いと感情の関りについて感じ取る経験と活動であった。

授業計画の第一ステップとして、地元である

廿日市市のウッドワン美術館の絵を鑑賞し、今回は「筆あと」に注目することを提示して、「筆あと」から感じたことをグループで伝えあう。（「であう」）

第二のステップとして、「名画の『筆あと』を研究し、作者の思いに近づこう」と題し、富士山の模写用下絵に着色する。

「筆あと」の重ね方や太さを変えてみることや、筆あととは同じで、色を変えて着色することを通して、感じたことや、試してみても分かったことをワークシートにまとめる。それを基に、グループで根拠を示して話し合い、感じ方の相違を交流する。ここで、「試してみても分かったことは何か」「作者はどんな思いでかいたと思うか」を投げかけ、児童にそれぞれの思いをまとめさせる。児童は、「点が細かいと柔らかいイメージがする」や「こってりした『筆あと』が力強い感じがするから、山の険しい感じを出したかったのだと思う」などと意見をまとめた（図 8 参照）。

次に、学芸員から美術作品の解説を聞く。児童は、「絵の具のうねりで激しい怒りの気持ちを表したかったことが分かった」「やさしい気持ちを表しているのかと思ったら悲しみを表していたので驚いた」「色や形だけでなく、『筆あと』にも作者の意図や思いが込められていることが分かった」などの考えを出すに至った。

授業のまとめでは、作者の表現意図や思いと自分が感じたことの共通点や相違点をワークシートに書かせ、「筆あと」が与える表現の違いなどの効果に気付くようにする。

【材料・用具】 「筆あと」に特徴のある美術作品の図版（黒板用・グループ用）、模写用下絵、語彙一覧表、ワークシート、絵の具、筆、筆洗、雑巾

一経験したことを基に発想力を養い、

他者理解へとつなげていく授業一本題材は、鑑賞の分野でありながら、みるこ

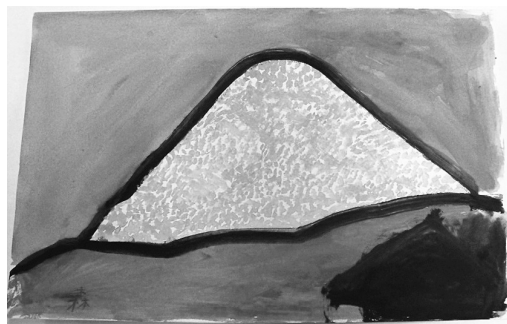


図8：児童作品「筆あ〜と研究所」



図9,10：児童作品「筆あと」

とから始めるのではなく、「筆あと」を試し制作したり、思いを巡らせたりした経験を基に作品をみることを行っている（図9、10参照）。視点を「筆あと」に絞ることで、具体的に様々な方法を試すことができ、そこで感じた効果を今後の制作に生かすこともできる。また、「筆あと」から生まれた思いを言葉にし、それを他者と共有する場面では、思いの根拠を示して伝えることで、より学習に深まりが出ている。まとめの場面では、様々な考えがあることを知り、これからの表現に生かせるよう整理している。

本題材により児童は、思考力・判断力・表現力を総合的に高め心豊かに生きている今を実感した。

3. 今日なぜこのような図画工作科教育が可能となるのか

（1）宮園小学校では、各担任の先生が、児童の学校生活全般の様子を捉えた上で図画工作科教育の目標を設定し、児童の発達を支える授業を展開してきた。

児童が制作した作品からは、目標を理解し自己の内面を出発点として作品制作に没頭する様子が伺えた。図画工作科教育を専門的に学んだ教諭は決して多いとは言えない中で、なぜこんなことが可能なのか。

校舎内を見て回ると、廊下のあちらこちらに児童の作品展示のみならず、職員による共同制作の作品や、芸術に関するクイズや本の紹介な



図11：教員による共同制作「平和の輪」



図12：学習環境づくり

どがされていた。児童が探検的に見て回ることで廊下になっており、普段の学校生活の中でも表現活動に親しむ環境づくりが魅力的になされていた（図11、図12参照）。

また、空き教室を利用した「アート展示室」が低学年・高学年で設置されており、授業作品や夏休みの作品が展示してある。（図13参照）児童が試行錯誤してたどりついた過程と成果の作品、制作意図を言葉にしたものなども体感し、共有することができるになっている。造形遊びや作品制作に欠かせない材料については、宮園小学校では、様々な材料（プラスチック容器、ラップ芯、布、ボタン、毛糸、ダンボール、発砲スチロール、プチプチ…等）をきれいに仕分けし、保管する場所を設けている（図14参照）。これらの材料は、学校便りを通して材料を集めることを呼びかけ、保護者の協力を得て集まったものである。このことによって、家庭におい

て図画工作科教育に関する会話を生むことや児童が作ったものへの関心を高めることにも接点ができ、関わり合いを豊かにすることにもつながっている。

（2）長年表現教育に関わり、組み立ててきた専門職の視点から考察してみた場合、より豊かな図画工作科教育の開花の背景には次の点が浮かび上がってくる。①教師が図画工作科教育のきっかけづくりの中で、学校・児童・保護者を巻き込んで一体となっていること、また、②図画工作の時間では、児童が試行錯誤する時間に重点を置き、独自の表現へと進んでいけるような授業計画がなされていることが考えられる。さらにはまた、③作品を通した他者との交流を大切に、関り合いの中で学びあう学習環境づくりがなされていることにその要因があるとも考えられる。

（3）その他の取り組みの工夫としては、昼休み後の10分間での補習に、スケッチをする日が組み込まれていることである。（図15、16、参照）このスケッチの時間は、いろいろな線を引いてみるところからはじまり、モチーフ（植物や道具）をよく見て描く活動を行っていた。一週間後に同じモチーフを描いたにもかかわらず、ぬり込まれたり、描き込みが増えたりするなどして、表現に変化が見られた。（図17、18参照）



図13：学習環境づくり：空き教室を活用した成果物展示



図14：学習環境づくり：図工の材料ボックス

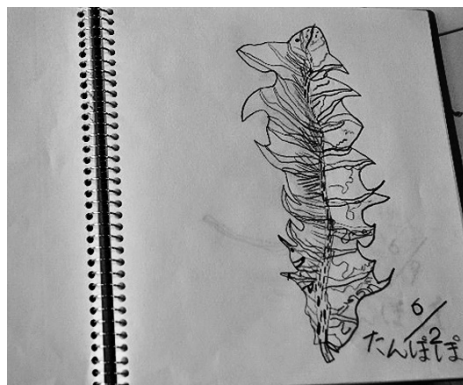


図15：児童作品「クロッキー帳のデッサン」

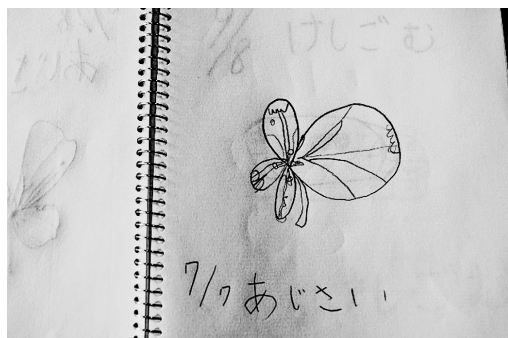


図16：児童作品「クロッキー帳のデッサン」

これは指導者の言葉かけによりモチベーションが持続され、描くことにさらに興味をもったことの表れである。クロッキー帳には日付のあるそれらの作品がたまっていき、自分について振



図17：児童作品「クロッキー帳のデッサン1」

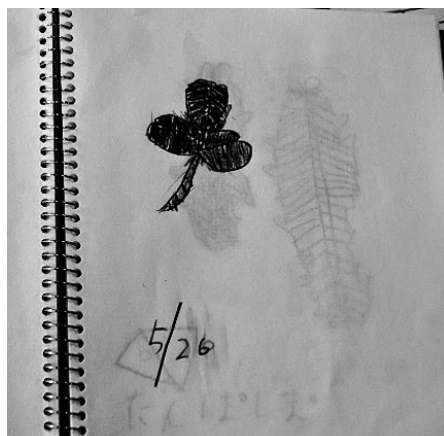


図18：児童作品「クロッキー帳のデッサン2」

り返ることのできる貴重なものとなっている。

また、図画工作科教育の授業で取り組んだことへの自己評価表として「『アートの足あと』～自分の思いを表現しよう～」という取り組みがある。(図19参照)これは、「たのしかったですか」「じぶんのかんがえたものになるように、くふうしたことはなんですか」「きょうのずこうでべんきょうになったことはなんですか」などを題材ごとに自己評価表にまとめ、時には制作で作ったものを写真に撮り、それを貼るなどしてファイルに閉じていくものである。

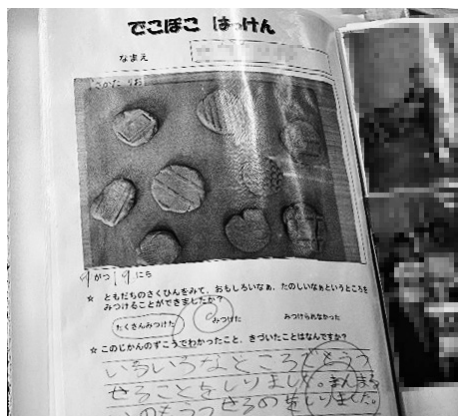


図19：児童による発見帳『アートの足あと』

体験したことを言葉にすることで、言語による表現意欲も高まっていく。

こうした学校全体での取り組みが、日々刻々と成長する児童の発達を支え、図画工作科の時間のみならず、いろいろなことに意欲的に取り組む態度や、日常生活の中の思考力・判断力・表現力の助長を促している。宮園小学校では、授業に関する研究もさることながら、学習環境づくりにおいても校長先生をはじめとする職員全員で取り組まれており、発見や発想のチャンスにあふれる豊かなフィールドづくりがなされている。

4. おわりに

(1) 1964年ドイツの代表的な芸術学者G・オートーは、子どもの図画教育論に代わる、現代の表現教育の論理を特徴づけた。そして彼はその基本的論理構造を<材料・素材―実験―組み立てること Montage>と言い表した。彼はその学問研究を通して、現代の表現教育において、現代の表現活動の中心軸が、材料・素材の体験を糸口に、実験的に探る実験的模索への道が開かれていくことを明らかにした(鈴木(2001))。

この表現教育観は、学問的出自の異なる南ドイツのシュトゥットガルト教育大学教授であったH・ブルクハルトに受け継がれ、素材・材料を手掛かりとした素朴な描画・表現活動の積み重ねから、子どもたちの探求的表現活動へ開かれていく表現教育観へ受け継がれ、実践的に深められていった(鈴木(2015))。

以上の表現教科教育学の現代的動向を視野に入れた時、宮園小学校の表現教育の取り組みは興味深い研究活動となっている。同校実践では、「〇〇教授法」の類いの特別な教授方式を取り入れるのではなく、様々な材料・素材との「であう」を大切にしながらも、「あじわう」「さぐる」「みつける」「あらわす」といった子どもたちの活動を重ね・組織するという、表現活動のナチュラルな体験活動・探求活動を編成している。

(2) そこで本節では、廿日市市立宮園小学校の図画工作科教育を考察し、その特徴を以下にまとめたい(宮園小学校(2017)参照)。

1) 宮園小学校における図画工作科の授業はどの学年においてもまず、導入の言葉に温かみがあり、教師が学年の発達過程をふまえて、導入の言葉かけを厳選し、児童の心をワクワクさせている。その言葉かけにより、授業が活気にあふれ、挑戦してみようとする気持ちが高まり、児童の試行錯誤が始まっている。

2) すべての題材に第一のステップである「さ

ぐる」時間が十分にとられている。子どもは、数ヶ月にわたって素材に触れて積み重ねたりつないだり切り開いたりする中で、新しい形に出会っていく。教師は、身近な材料を使い、発達過程に応じてその強度や大きさにも気を配っている。また、使う道具も同様、子どもの発達に応じて、注意力を要する道具にも挑戦させ、何ができるのか自分でつかむことをさせている。

3) 他方また、身近な素材で未知の体験をさせている。もともとの用途がある素材を切ったりつないだりする中で変化させ新しいものへと変えていく。出来上がったものもさることながら、制作する行為そのものがその子にとって未知の体験である。そして、自分なりにイメージを持とうとし、作りあげようとしながら方法を探り、判断し、表現にたどり着く。(探求的・実験的活動)

4) 更にはまた、子どもの視線や思いを重視し、支えることをしている。集団での授業にみえる子どもの発達の個人差を、教師は自然なタイミングで支えてきた。そして個に応じ、子どもとの会話のやり取りを記録したり、他者の工夫を紹介しながら活動が停滞する子どもを刺激したりするなど、柔軟に授業を展開していた。

(3) 図画工作科教育の原点 今回考察した宮園小学校の実践は、図画工作科教育の原点である大切な要素を含んでいる。ふり返ると、教師主導型の題材が多かったことに問題が見いだされ、その改善策として「造形遊び」が導入された。ここから図画工作科教育は始まったと言っても過言ではない。

教師は、個の発達や成長を見守る立場として、題材によって生徒を刺激したくさんのことを感じさせ、気づかせる授業を行っている。まさに、主体的な学習活動であり、ここで得た自信や楽しむ気持ちは人格の形成にも大きく影響する。

(4) 未来につながる力 宮園小学校にみる図画工作科教育の豊かな導入により、子どもの心

に生まれた高揚感が、手の動きに伝わったり、
思いを巡らせ発想したりするなど、心と体が一
体となって表現へのエネルギーを生んでいる。
自分が自分であることを楽しんでいる瞬間であ
る。こうして児童は自分に自信を持ちはじめ、
自分を愛することで、他者の存在を受け入れ認
めることができるようになっていく。

やがて「思春期」を迎え、他者の存在が自
分を大きく揺るがすような時期に入る。図画工
作科教育で得た感情や感覚の記憶は、「思春期」
の子どもの発達、さらにはその先の生き方に影
響を与える可能性を大いに持っている。

本研究で筆者は、先に触れた全国的な図画工
作科教育の困難な状況の中で、児童の発達を柔
軟にとらえ豊かな授業を展開している宮園小学
校にその意義を学び、魅力の理由に迫ることが
できた。

【註】

＊：この大会では、「いのち輝く造形教育を求
めて」をテーマに、子どもの生き方や自己表現
にかかわる図画工作科教育のあり方が探求され
た。

【参考文献】

- ・『第56回広島県造形教育研究大会 大竹・廿日市
大会ーいのち輝く造形教育を求めてー』広島県造
形教育研究連盟、2017年11月17日。
- ・『第56回広島県造形教育研究大会[大竹・廿日市
大会] 小学校研究テーマ：つくりだす喜びを育て
る造形教育を目指して 実践事例集』廿日市市宮
園小学校、2017年11月17日。
- ・鈴木幹雄・佐藤昌彦『表現教育にはそんなことも
できるのか』あいり出版、2015年。とりわけその
第1章「グローバリゼーションの下、表現教育の
意味を考える」参照。
- ・ヘルマン・ブルクハルト著、堀典子訳『現代ドイ
ツにおける美術の授業と子どもの絵』、開隆堂出版、
1982年。

- ・鈴木幹雄『ドイツにおける芸術教育学の成立過程
の研究』風間書房、2001年。
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説ー図画工作
編』、2008年。
- ・文部科学省『幼稚園教育要領』、2008年。
Attractive Art Education in an School named
Miyazono Elementary School in Hiroshima
ーWith respect to the severe situation of Japanese
art education nowadaysー
Misato Kaneko (Oono Junior High School)

【註】

文章中に「第一曲面」「第二曲面」を設定し、
子どもの発達過程を第1学年から第3学年、
第4学年から第6学年に大きく分けている。
第一曲面で子どもたちは、楽しさを原動力に思
いのままに制作に取り組む時期、第二曲面は、
客観性を持ち始める発達過程をもとに自己をみ
つめることの出来る時期とし、このことを大き
な転換期としてとらえた。